

惠谷隆戒著

## 『浄土教の新研究』

木村宣彰

まさに開拓的な労作である。本書が「浄土教の新研究」と称されているのも当を得たものである。(一)まず新資料によっていること。従来、学界に知られていなかった古佚書を新資料(源隆国の「安養集」)によって復元し、その復元本によって各章の論究が進められている。それら復原本は本書の付録とされている。それだけで一六〇頁余にも及ぶものであり、学界を益すること絶大なものがある。(二)又、本書は朝鮮の浄土教に多くの紙幅を費して詳論されている点も特筆さるべきである。現今、浄土教の研究は、日本で成立或いは発展した宗派の宗学、宗史の把握にとめるか、印度・中国・日本という地域的に個別化された枠組の中で考察する傾向にあった。これは旧い三国佛法の問題意識であり、そこからは朝鮮佛教の研究は望むべくもなかった。ところが本書は資料が少なく極めて困難な朝鮮佛教の解明を為している点も新研究の成果として特記されるべきである。

著者の惠谷隆戒博士については、筆者が喋々するまでもなく「円頓戒概論」や「概説浄土宗史」など十指に余る著述によって知られるように、浄土教や円頓戒に関する研究業績は衆目の見知するところである。殊に先年、博士の古稀を祝して七十名の学者によって千四百頁にも及ぶ大論文集「浄土教の思想と文化」が献呈された。これは著者の学積を如実に知らせる一例と言えよう。

さて、此に新研究として世に問われた本書は、著者が昭和二年に始めて新資料「安養集」に接して以来、実に半世紀の永きに亘って積み重ねられた研究成果を纏められたもので、単に思い着きや寄せてらって新研究と称されている訳では決してない。自序に「学界の旨点を説明すると共に、新資料を学界に供せんがために本書を出版することにしたものであって、本書の題名を浄土教の新研究と名づけた所以も、かかる点によるものである」と述べられるのは、著者の並々ならぬ自信のほどが伺えるのである。

本書は、既に世間から忘れられていた古佚書を復元し、それら復元本の思想内容を説明した論文を中核として都合十六章の論文と、付録の六編の復元本から成っている。その内容は中国(第一章〜第四章、朝鮮(第五章〜第八章)、日本の浄土教(第九章〜第十二章)と、法然浄土教を中心とする歴史的考察(第十三章〜第十六章)とに大別できる。就中、第一章から第十二章までは本書の眼目ともいえるべき新資料に基づく論調である。

## 二

中国の浄土教に関する論究は次の四章である。

### 第一章 隋唐時代の観經研究史観

### 第二章 華嚴二祖智儼の浄土思想について

### 第三章 古佚書道闡の観經疏について

### 第四章 古佚書竜興の観無量寿經記の研究

まず第一章では、六・七世紀の中国に於ける観經研究に慧遠の観經觀を中心とするものと、道綽・善導を中心とするものと二つの流れがあることを明している。前者の靈祐・吉藏・法常・道闡・竜興等の観經研究は觀念的であるのに対し、道綽・善導は実存的であると、**「觀念主義より実存主義への思想的転換が見られるのであって、そうした点にこの時代の観經研究史観がある」と論じている。**

第二章は、華嚴宗二祖智儼の「孔目章」の浄土思想を論じたものである。特に「孔目章」の十種浄土章・寿命品内明往生義・六念章の内容について概観されている。智儼の浄土思想については望月信亨氏や石田充之氏の中国浄土教の研究などに於いても全く論及されていない。ところが本書は一章を立てて詳論されている。これは恐らく元曉等の朝鮮浄土教を考える上で看過することが出来なかつた故と思うが、著者の卓見である。そこで著者は智儼の浄土教の特色を撰論宗の法常から継承した四種浄土説と、「弥勒発問經」の慈等の十念説の上に見出し、両思想が唐や新羅の浄土教に重大な影響を与えたことを解明し

ている。

第三章および第四章は、唐代の「観經研究家」である道闡と竜興についての研究である。不幸にして両師の著述は散佚して伝わらないが、著者は大変な苦心の上、新出資料「安養集」をはじめ「楷定記」「伝通記」等によって復元しての立論である。まず道闡の「観經疏」については約三分の二が復元され、その復元本に従えば九品往生、別時意等の問題に特色が見い出されるという。彼の思想は善導等とは大きく異り、敦煌本「無量寿經讚述」ときわめて類似すると論じられている。竜興の行歴については従来定説が無かつたが、「金石萃編」所載の「大唐竜興大徳香積寺主浄業法師塔銘并序」によって延和九年五十八歳で寂した瑜伽唯識の学僧浄業であると推定し、望月信亨氏の「善導の門人」説を訂正している。その著述「観無量寿經記」は伝わらないが、著者は約三分の二復元を完成し、それによって彼が五姓各別説に立ち、善導流の称名正因説をしぞけ、全体として慈恩・慧遠の影響が濃厚であつたことを解明している。

これら各章の論文は、中国浄土教の研究ではとかく看過されがちな分野であり、随処に著者の学識が発揮されている。殊にその著述が散佚して知られなかつた竜興や道闡については勿論のこと、智儼の浄土思想の論究は高く評価されるであろう。

(一)ただ第二章の智儼の浄土思想で、著者は彼の四種浄土説は全面的に撰論宗の法常の説を継承するものと論じられている。しかし筆者の寡聞な見解によれば慧遠の浄土学説の影響も無視することは出来ぬのではないかと考えられる。著者の説は既に

凝然が「維摩經疏菴羅記」で主張するところでもあり、何らかの根拠があると思うけれども、法常の著述は現存せず詳しく知ることが出来ないのは残念である。著者は第一章で慧遠を評して当時の浄土教研究の先鞭をなすものとして高く位置づけられた。この四種浄土説についても同様なことが言えるのではなからうか。智儼の思想に慧遠の影響の強いことは、既に坂本幸男氏（華嚴教學の研究）や鎌田茂雄氏（中國華嚴思想史研究）によって実証的に究明されている。慧遠の「大乘義章」によれば、初地上諸佛所在の真佛土は、法性土・実報土・円応土に分かれ、更に円応土は他受用土と変化土とに両分される。結局、真佛土は法性土・実報土・他受用土・変化土となり、智儼の法性土・実報土・事浄土・化浄土の四種浄土と相応するように思う。著者は慧遠について全く闕説されていないけれども、慧遠との関連を無視することは出来ないのではなからうか。

(三)第三章では西明寺道闡が智儼門下の道世、道宣と共に「三人は同門の間柄」（三三頁）との見解に立って論を進められているが、これについては更に詳しい論証が望ましいように思われる。この件で筆者は特別の見解を有しないけれども、著者は道闡について第一章および第十二章では「戒珠往生伝」に拠って「道綽の門人であった」と論じている（三三頁、一八一頁、一八六頁）。第三章の所論とどう調和されるのであろうか。多少の説明が望まれる。卑見によれば、復元本「観経疏」に従うと彼は阿弥陀佛を変化身と為している点より推して無条件に彼を道綽の門流と考えるのは些か困難なように思われる。

(四)道闡・竜興の撰述の復元にあたり著者はあらゆる浄土典籍を抄録して十全を期しておられる。ただ筆者の知るころでは凝然の「維摩經疏菴羅記」の中に「道闡法師観経疏云」、「竜興法師観経疏云」としてかなり長文の引用が存している。それが道闡や竜興の文であるか否かを俄かに決定できぬけれども、本書付録の復元本には収録されていないようである。些か管見を附記する次第である。

### 三

次の四章は、文字通り朝鮮新羅の浄土教の研究で、著者の学識が遺憾なく發揮されている。殊に法位や義寂については、浄土教に関する著述が散佚して伝わらず、その思想を直接知り得なかつただけに、今回公にされた復元本に拠る論究は、まさに著者の最も特筆に価する業績というべきであろう。

第五章 新羅法位の無量寿経義疏の研究

第六章 新羅元暁の浄土教思想

第七章 新羅義寂の無量寿経述義記について

第八章 新羅憬興の浄土教思想

まず第五章では、新羅浄土教の系譜を整理概観し、その特色を中国の浄土教が「観無量寿経」中心であったのに対して新羅では「無量寿経」「阿弥陀経」が中核となると論ぜられた。新羅浄土教の性格を特色づける上で大きな視点というべきであろう。著者はそうした見地に立って、法位の「無量寿経義疏」の内容が紹介された。即ち法位は四十八願を重視し、一々に願名

を付した。この願名呼称は法位に始まるとし、更に新羅淨土教の特色である慈等の十念説を採用する点など詳論し、彼を朝鮮淨土教の先駆者と位置付けている。

次の第六章は、元暁の伝歴・著述を整理し、彼の「遊心安楽道」の真偽問題について論究された。更に彼の淨土思想は「大乘佛教の絶対否定的全体の思想」に立脚するもので、「淨土往生の機根を極めて高く評価している」(八九頁)ところに特色があることを指摘されている。この章で注目すべきことは何と云っても「遊心安楽道」の真偽問題である。「遊心安楽道」については、かつて名畑応順氏(迎才の淨土論)が述べておられるように迎才の「淨土論」との前後問題が学界の関心事であった。

ところが元暁の卒年が明らかにされるに及んで、元暁歿後に翻訳された經典を引用する「遊心安楽道」の真偽が俄に学界の重要課題となった。今、著者は、菩提流志訳の「大宝積經發勝志樂会」や迎才の「淨土論」などを引用すること、「無量壽經宗要」と同文の個所が存することなど、一々論拠を挙げて詳しく論じ、「遊心安楽道」が元暁の真撰でないことを論断されている。最近、韓国では安啓賢氏や金彊模氏のように真撰説の立場をとる学者もあるが、今のこの論文によって学界の懸案にはば結論を下されたことになるであろう。

第七章の義寂については、彼の伝記を考察し「慈藏・元暁・法位などの如き淨土教家と同時代の後輩」と為し、その教学は般若・法華・涅槃・唯識が中心であると述べ、次いで復元本「無量壽經述義記」の内容を紹介されている。特に「述義記」

には慧遠や善導の「往生礼讚」の影響が認められるという。

第八章の憬興については、現存する彼の「無量壽經連義述文贊」の内容を紹介し、慈等の十念説を重視する新羅淨土教の中にあつて、「称名の十念を強調しているところに彼独自の見解」があることを論述された。

今、ここに紹介した四章の論文は、従来学界の盲点とされて来たところで、本書の著者の独壇場である。資料が少なく未解明の分野の多い朝鮮淨土教の研究にとって、著者の復元本やそれにもとづく論究が発表されたことは今後の研究を前進させる功績の大きいことを確信する。

尚、ここで若干の点について、浅学の卑見を述べて御教示を願いたい。(一)第六章・第七章で元暁や義寂の著述について詳しく検討がなされている。元暁の著述として挙げられる「金光明經疏」八巻と「金鼓經疏」八巻とは同本異名である。これが同本異名であることはすでに永超録の中に「金鼓經疏八巻 元暁外題云金光明經疏 内題云金鼓經疏」という指摘がある。恐らく義天録の「金光明經疏」と東城伝燈目録の「金鼓經疏」とが重複したものであろう。「般舟三昧經」の註釈については義天録に「疏一卷」と記されているが、本書の中の著述目録には「般舟三昧經宗要指事」一卷とあるのは何を根拠としての記載か不明で、更に本文中で「般舟三昧經略記」と述べられているのについても多少の説明が必要かと思う。第七章で「遊心安楽道」の偽撰が論証されているのに、第二章や同じ第七章で元暁の現存著述として同書を挙げられるのは、何らかの補註が望ま

れる。現存著述として続藏經所収の「中辺分別論疏」が欠脱しているのは何か根拠があるのであろうか。義寂については義天録所載の「小阿弥陀經疏」一卷、「大涅槃經料簡」一卷、「瑜伽論疏」十七卷等々が脱落しているのは残念である。

(四)第七章で元暁の浄土教を明らかにするために「三国遺事」の中から彼に纏る逸話を輯め整理がなされている。この事は、従来著述の研究に終始していたのに対して著者の卓見である。ただ筆者の卓見によれば「金剛三昧經」に纏る逸話で元暁と大安聖者とを同一人とされているが、「海東佛祖源流」等によるまでもなく、この両者は別人である。更に「三国遺事」の中の逸話で、元暁が民衆の為に浄土往生の行法として「靜觀法」を教示したことを伝える巻五の「広徳・嚴莊」の条があるが、これは既に三品彰英氏の論稿でも紹介され注目されているところである。本書にそれが触れられていないのは、或いは少し見落された為か。

(三)義寂の「無量壽經述義記」については、先に春日礼智氏の輯逸本があり、更に春日氏は近年「新羅義寂とその無量壽經義記」の論稿を発表されている。今、著者は「安養集」等の資料を抄録し、春日本の不備を補ってより完全な復元本をものにされた。ところが、著者の復元本は「第八無量壽經、宋朝天竺三藏求那跋陀羅云云」で始まっている。この個所は「安養抄五」および「安養集十」による旨付記されている。筆者は未だ「安養集」を見る機会を得ないけれども、著者の指示に従って大正大藏經所収本の「安養抄」と対照すれば次の如くである。即ち、

「安養抄」は「無量壽經述記云」として「部党不同者、説西方浄土經部党多種、(中略)初兩卷經本亦多種、第一無量壽經二卷、漢代安息國太子、名清字世高所訳云云」以下、兩卷經の異訳を第一乃至第八まで記している。復元本は何故に大正大藏經一段分を欠脱し「第八無量壽經」から始まるのであろうか。「安養抄五」と典拠が示されているだけに理解に苦しむのである。補足的な説明があればより一層読者に便宜を与えようと思う。復元本四一八頁六行目の「又云」は義寂の文ではなく「安養抄」の編者の言葉かと愚考する。

その外、浅学の筆者としては直接著者に拜眉の機会を得るならば種々御教示賜りたいと考える点も若干ある。

#### 四

さて、第九章以下は日本浄土教の研究で次の諸論が収められている。

第九章 元興寺智光の無量壽經論釈の研究

第十章 日本天台と浄土教の受容

第十一章 叡山静照の浄土教

第十二章 源隆国の安養集について

第九章は、前来の各章と同じく著者の復元本によって智光の浄土教を論じたものである。智光についてはかつて戸松憲千代氏が「大谷学報」に都合三回に亘って詳細な論文を発表され、「無量壽經論釈」の復元も試みられている。これについて著者は、戸松氏は「安養集」所引の「論釈」によらなかつた為にな

備を来たしたものと指摘し、自らの復元本の内容を紹介された。特に日本における四十八願の願名呼称が彼にはじまること、敦煌本「無量寿経讀述」と酷似することを論じている。第十章は日本天台の円密禪戒の四宗兼学の宗風の中に如何に浄土教が受容されかを論究されたものである。第十一章は著者が東大寺で発見した静照の「極楽遊意」および「四十八願釈」を中心に考察したもので、静照の浄土教は天台の伝統を遵守しながらも、第十八願、口称念佛を強調するところに特色があったとする。「観経」中心の叡山浄土教が、彼以後「無量寿経」中心の浄土教に展開してゆくとの論旨には興味が引かれる。

第十二章は、本書の研究の基礎となった「安養集」に関する論文である。学界に未紹介の「安養集」について「製作の由来」「内容」「価値」「所引の古佚書について」論じた大作である。「安養集」は東晋慧遠の白蓮社の遺風を慕う人々が二百余巻の浄土典籍の中から要文を編輯したもので、厭離・欣浄・修因など七門に分別された一種の論義集であること、純正浄土教の典籍や古佚書を多く引用するところに価値があることなどを明らかにせられた。所引の古佚書の主なものは既に述べた通りである。他に唐靖邁の「称讚浄土経疏」、宋源清の「観経疏顯宗記」等の長文の引用があり、それぞれ貴重な資料であることが明かされている。いずれにせよ著者の手によって一日も早く「安養集」自体の公刊が待たれる。

最後の四章は、法然の浄土教を中心とする歴史的な考察である。

第十三章 日本浄土教思想史上における凡夫性の自覚過程について

第十四章 浄土教の批判精神史上における選択集の価値

第十五章 中世浄土宗伝法史について

第十六章 近世浄土宗伝法史について

第十三章では、聖徳太子から説きはじめ、法然の「凡夫性の自覚は、唐の善導のそれを全面的にすなおに受容し」(三〇二頁)徹底したものになったことを論じ、第十四章では、法然の「選択集」は捨閉闍抛の四文字に批判精神の中核があり、「選択集」に対する誘難は「批判精神の高さを物語る」と論じている。

浅学の筆者には著者の「凡夫性の自覚」とか「批判精神」とかが一体何を指しているのか、その概念が不明瞭で十分には理解できない。多少言葉を費して意味内容の説明が望まれるようである。

第十五章・第十六章は、著者自ら「浄土宗の伝法研究が従来不十分であったので、幾分でもそれを明確にせんがために記述したもの」と述べられる如く、実に百頁余に亘って詳細に論究された大論文である。その内容は(中世)「三祖然阿良忠以後の伝法」「阇師の伝法制度の確立」「阇師以後の伝法」、(近世)「道・感二師の伝法改革」「江戸時代の伝法史」「明治時代の浄土宗論諍史」について考察されている。筆者はこの方面に全く不案内でその論旨を充分に伝えることが出来ないが、斯学の専門家には大きな指針となるであろう。

以上、各章を通じて知られるように、著者の積年の学識が遺

憾なく發揮されている。ただ惜しむらくは、単純な誤植が多いことである。「荊淫湛然」「売・高僧伝」の類(二頁)、誤植の為に同一人物が三通り(法聰・法聰・法聰)に表記される例(二頁、四頁)など気にかかる。本書が著者の大変な労作であるだけに惜しまれてならない。

## 五

本書で著者が絶大の自信をもって世に問われたのは新資料「安養集」にもとづく論文であろう。その意味で本書の約三分の一、一六〇頁にも及ぶ付録の復元本こそは正に不滅の意義を有するものである。

- 一 唐道闇撰観無量寿経疏
- 二 唐竜興撰観無量寿経記
- 三 新羅法位撰無量寿経義疏
- 四 新羅義寂撰無量寿経述義記
- 五 元興寺智光撰無量寿経論釈
- 六 叡山静照撰極楽遊意(新出資料)

これらの復元本は著者が自序で記されているように昭和二年はじめに「安養集」に接して以来、実に半世紀を費した大変な労作である。自ら「復元本作製にあたり、最も困難な問題は、諸書に引抄されている文章を抄出し、これを如何よう配列するかという問題である」(三五二頁)と復元の苦勞が語られている。写誤も少なくない写本によって、しかも一々訓点を付して為された復元本制作は、老令の著者にとって並々ならぬ困難がともなつたと拝察される。今、復元本を一読するとき、著者の学問的情熱と深い学識が窺われ、またその真摯な人柄が偲ばれて畏敬の念を覚える。若輩の筆者がぶしつけな卑見を披瀝したところは、全て著者の労作に導かれて示教を乞うものとして寛恕されんことを願いつつ、この書の為に注がれた著者の心血の並々ならぬものがあつたことを願ふにつけ、その蒙る学恩に深く感謝せずにはいられないのである。

(昭和五十一年十一月、山喜房佛書林、A5版、  
三三六頁十一六〇頁付録十二〇頁(索引)、  
一一、〇〇〇頁)